



開院70周年記念に寄せて

特別顧問 服部修三

開院70年の歴史の中で、私の医師の履歴43年中、研修医時代昭和52年3月～昭和55年5月の3年2か月と内科医長として昭和60年1月赴任以来の34年の計37年間、当院で内科医師として働いたことになり、今更ながらよくぞ続いたことと感慨深いものがあります。この34年間は阿方院長に3年、大谷満院長に10年、大塚院長に10年、松井院長と大谷順院長に10年の計5名の院長に仕えたことになり、幾多の出来事が走馬灯のごとく思い起こされます。開院50周年記念誌では、各科のあゆみで昭和43年以降の内科診療体制と昭和60年以後の内科診療の内容、実績を中心に筆を起しましたが、阿方先生、大谷満先生の寄稿文を拝読すると、島根県の中山間地域の当院の立地条件から、当時すでに医師確保の困難さが示されており、大変ご苦労されたことがよくわかる。医師確保の難しさは、その後20年間の勤務でつくづく身に染み、その悪戦苦闘の変遷をこの開院70周年記念誌に内科の代表として記載した。病院の危機とりわけ内科の危機は、医師確保の困難さから何年かの周期で訪れるようである。診療科体制では外科、整形外科の医師数は確保されているようだが、眼科、精神科の常勤不在が続き、とりわけ眼科に1名常勤が必要であろう。さて令和元年8月現在の内科診療は若手2名、地域ケア科3名、糖尿病専門医1名と私の計7名で稼動しており、安定した診療体制である。今後の内科診療を担う医師(内科医、総合診療医)を常時確保できるかどうかが問題であり、島根大学医学部卒業の地域枠入学者と島大医局からの派遣の確保については、大谷事業管理者、西院長の手腕によるところが大である。一方では、平成31年4月に開始した当院での総合医養成プログラムで養成された総合診療専門医が増え、近い将来当院に就職し、長く内科診療を支えてくれることを期待するものである。

地域医療に目を転じると、地域医療を担う中核病院として、太田医師、笠医師が中心となり平成28年4月地域ケア科が開設された。長野県佐久総合病院地域ケア科をモデルとして船出し、訪問診療を中心に開業医、看護師、介護士、ケアマネージャー、他福祉関係者等との多職種連携を緊密に図る活動を実施している。平成31年4月掛合診療所が雲南市立病院の附属診療所となり、地域ケア科が担うこととなった。今後、木次町の田井診療所、吉田町の渡部診療所の後継者問題も予測され、包括的に地域医療をどう支えるかが今後の課題である。佐久総合病院地域ケア科医師の講演では”繋がる”という言葉がキーワードであった。人と人の感情が繋がる、意思が繋がる、そして記憶が繋がるのが地域ケアのネットワークになると示された。一人一人の出会いを大切にして繋がるのが、病院理念の”地域に親しまれ、信頼され、愛される病院”を実践していくうえで重要である。平成30年3月開院した巨大でありにも立派な新本館棟に相応しい医療提供ができるかどうかは、職員一人一人の意識改革に寄るところが大きい。